

奥細道菅菰抄

上

911.32

1

上



子

性之德教之化不知

之味性之德教之化不知

其教德教者法之德教之化

之教德教者法之德教之化

德教者法之德教之化



所々幸に臣等と云ふ友人等
唐主人は而詳く一日研究想居
事儘不承此途而主人と云
ふ一の出来致母心原
我ちる心後漢書



うみをわつしと云ふと云ふ一なるい人
のききなりて云ぬと云ふと云ふ
いしと云ふと云ふと云ふと云ふ
の山わひかーおれ川をよにきくをぬひと云
めちつと云ふと云ふと云ふと云ふ
ねふと云ふと云ふと云ふと云ふ
よく云ふと云ふと云ふと云ふ
あるなりと云ふと云ふと云ふと云ふ

ところこーは来ふあ矢の道とうあむりて人の
 情を流ると云ーあくさう初めむけひぬを
 りれあめつ地ハ人ふをさくあくをれ人
 天地ふを架さう傳ふあさうのたもあ
 ちくくつあてあめあさくさく又何を
 するーやま入やとこのあどあ矢くあむあ
 勅傳燈住僧正應堂上人探毫於日曜
 峯泥紫園

拾遺
 初集

みるあめのとくはふああさくさく
 めさくさくはれあの情ふーやくさく
 あかりりりーあさくさくさくさく
 とあーああつあふあさくさくさく
 下4ばあーあさくさくさくさく
 あさくさくさくさくさくさく
 とあさくさくさくさくさくさく
 すーあさくさくさくさくさくさく

あふれしものや十とあるはなりみちあ
あふれしものや十とあるはなりみちあ
あふれしものや十とあるはなりみちあ
あふれしものや十とあるはなりみちあ
あふれしものや十とあるはなりみちあ



九例

○此書小位ある所もなかり古き書物の如くのと
も挙てふえたる我をくくし申述ぶれハ例聖の
祖公祖と未孫する公と風雅なり宵壘也事なり
と公祖なるなりけむとふはるど乃るすふつと
此をこそまが人のものなりとあるんよあをわ
うしとあるなりなりなり

○まゐるのうを頼さしふらふのうを味なりとあては
れあはれけり老女等ふよるなど一あふそそくを常用
のうをきくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

○ 江家の修、よのち別子編て所病とて、其妻を
○ 其妻の上より、ふかしするものといふ。○ 我中、安山

乃御丈直生...
 つく...
 小刺...
 ぼず...
 一...
 其...
 ○...
 印...
 中...
 全...
 本...
 凡例畢

俳諧系譜

此系ハ唯俳諧傳來ノ次序ノミ
 ニテ門風ノ統系ニハアラズ

守武

伊勢荒木田神主本連
 歌師俳諧式始于此

宗祇

号自然翁又曰種玉菴本
 歌人好連歌兼俳諧ヲ

宗鑑

俗名志奈弥三郎住山崎
 本連歌師後為俳諧家

貞徳

松永氏号長頭丸俳諧
 師撰御傘クロ、等ヲ

貞室

安原氏号壽軒俳諧師
 撰玉海集獨吟十句等

季吟

北村氏歌學所撰
 埋木水鏡等

芭蕉翁

又号風羅坊名
 桃青詳傳記左

聖訓

+

松栢子家清宅
地の外ありと云

正德元年
子生

世々の実爲に祖宗の法乃ちあると云 按ずるや
近世の如き能くあると云と宗廟と云ふに柳

云ハ東教下向
の好まざる

士女畫新七之六 乃以とあり又より婦あり

斗三石
探石

造とまひやるをふおしそふお世つふ入と

いぬときふの世乃中よのしるしのふ

とあるは、一十八の年、此時なりと云々
昭應三年 然るに

蟬吟子不棄少一亭寬六尺能四月世要

一、家子孫上君臣忠國風雅乃錄一二以存之

款のいなり迷骨張屋々高徳い小宅也報悉院

納く六月晦日其後之来通世能ありと也

二君子仕さるゝと告志なり4歳と乞ふなりと

あつちーるにーれきと秋安を同僚城孫

大吏といふもの
門子録冊を粘り
て

少は京師に於て終り世より一紀以後又深川一

立降と曰く年々秋はく候行はる中はるふとあり

冬は毎い上り後小文記ありのなりとあり

えと改めしと候と号にけ年々八月末の末

一海をぬき二年の末北に新師をむ実細記ありとあり

年は北よりみ浪屋張何勢強と及く大津小

白とありぬき二年の末石山のとくは幻住菴院

むすむ白の秋ありはるふとあり

と候とありとありとありとありとありとあり

東若を流し東海道をぬき石山に幻住を

ありとありとありとありとありとありとあり

故郷にありとありとありとありとありとあり

うちとありとありとありとありとありとあり

ありとありとありとありとありとありとあり

幾仲寺ふ幕あり

名傳記ハ伊賀上野の能士相面相面の筆記

能の書孫より孫に加賀とあり

と候とありとありとありとありとあり

芭蕉師と稱せしむるハ去來に縁在る
 此の芭蕉師ハ今迄に其の師乃
 名に事ばいよく知れり如回つる人
 師とて名とふのこにある者他門乃人
 我々向ふ者なくと稱せしむる者ハ師
 師とて名とふの師とて名とふの
 然るに人々のこれを知るふゆへに
 今ハ此の芭蕉師とて名とふの
 今ハ此の芭蕉師とて名とふの

芭蕉師
 芭蕉師

和歌の芭蕉師とて名とふの
 芭蕉師とて名とふの
 芭蕉師とて名とふの
 芭蕉師とて名とふの

傳記畢

芭蕉師とて名とふの
 芭蕉師とて名とふの
 芭蕉師とて名とふの
 芭蕉師とて名とふの

引用書目

老子經

莊子

書經

詩經

易經

大學

朱熹序

周禮

論語

荀子

孟子

孔子家語

韓非子

春秋左氏傳

國語

吳越春秋

史記

前漢書

晉書

爾雅

說文

劉熙釋名

玉篇

字彙

正字通

書言故事

尺牘雙魚

六韜

楚辭

文選

杜詩全集

杜律詩集

唐詩選

三體詩

白氏文集

古文前集

同後集

陸璣詩疏

圓機活法

山海經

神異經

博物志

淮南子

列仙傳

白虎通

風俗通

西京雜記

桃源記

枕中記

世說新語補

本草綱目

五雜俎

太平廣記

四部稿

熙朝樂事

歲時記

類書纂要

中臣被

日本紀

續日本紀

續日本後紀

古事紀

舊事紀

古語拾遺

藤森社緣起

前太平記

東鑑

源平盛衰記

源氏一統志

年代廣記

朝野群載

鰕夷志

大日經

金剛經

楞嚴經

阿彌陀經

法華經

涅槃經

大智度論

五分律

法苑珠林

釋氏要覽

祖庭事苑

傳燈錄

元亨釋書

萬葉集

古今集

後撰集

拾遺集

後拾遺集

金葉集

詞花集

千載集

新古今集

新勅撰集

續後撰集

續古今集

新後撰集

新千載集

新後拾遺集

夫木抄

西行山家集

同家集

清輔奧義抄

同袋艸子

拾芥抄

八雲御抄

秘藏抄

顯註抄

無名抄

童蒙抄

袖中抄

歌林良材

藤原系圖

百人一首抄

名所和歌集

名所方角抄

連歌産衣抄

源氏物語

伊勢物語

枕艸子

徒然艸

古今著聞集

和漢三才圖會

通計百一十三部

以外俳集俳書若干

奥細道菅菰抄上

越前丸岡 兼笠菴架一搥

古今後集春夜宴桃李園序夫天地者萬物之逆旅光

陰者百代之過客ト天地ノ運旋日月ノ行道ヲ旅ニ

喻逆旅ハハタゴヤ光陰ハ日影ノウツリ行ト過客ハ旅人ヲ云ナリ

の生涯ハ俗ノ一生ト云ガ如レ莊子吾生也有涯古人も多ク旅小死ス

是ニテ序中發端ノ詞也予もいづれのころこの本序也

片雲乃風ヲ吹テハ是テ詩ニ下片孤雲逐吹飛

漂泊の思ひやらず 漂泊二字皆タゞヨフト訓ズサマヨヒアリクナリ

一 吟行ト書ベシ是モサマヨフニ
テ文選漁父辭ニ見タリ左遷ヲ云

江上ハ江都ナド云ガ
如シ江戸ヲサスナリ

協進
 幸貴川と云ふより
 山に如きまうり
 白川

左方のふち入りより下り
ちうに右に降り参り
地へ
ろ神のた

坐ノ字ヲソバロト訓ジ來レリサレ_レ此_ニテハ倉卒

坐ノ字ヲソバロト訓ジ來レリサレ_レ此ニテハ倉卒
ノ字ヲ用ベシ心ノアワタ_レシキ_レニテ神ハ喻_レモノ

十リ祖ハ道途祭名ト云首途ノ祭十リ黄帝ノ妹累祖

ト云人遠遊ヲ好ミ終ニ途ニテ死ス因テ以テ岐神ト

スト云日本ニテハ、猿田彦命ヲ衢神トス神代ニ天津

彦彦火瓊瓊杵尊下土へ降臨ノ片ニ迎導玉ヲ神ニテ

日本紀二詳ナリ後世佛家青面金剛ヲ傳會シテ庚申

卜稱ス道路ニ庚申ノ像ヲ建テ千々々ノ神トスルモ

松崎と栗列の案
みく下下

新勅撰 今あねら成のり一火焼すそ月あねら雲ふ浦崎
新後撰 少う一馬や旋唱花散よる波の月乃氷ふ千音唱
祝歌 成茂 後成

杉風の別墅は移る中
杉風の翁の山人朱砂小田原町は恒
す本名程屋前を患と云ふ者

あり別墅ハ別莊ニ同じ俗ニ下屋敷ト云晉書謝安傳園
基別墅ト云是ナリけり聖ハ東郊深川六百畝ト云云小

ありと祖翁性形とのを製一の天地人
と云ふ古記を有す○是と云ふを有す

その戸も何れ代りひかの家

以二月末より上巳のちちふをきあふ雖と云ふ

よみ乃時座とうく金糸を入宝下と云

二、此箱は一箱中から或ハ大小の箸と取

二、ふぎと共収獲を定むるものあり、八年

年歲歲花相似ヒタリ歲歲年人不同カハラのんむろ

人生おろそきと観
あゝの嘆あふあふ

あはれとの涙
あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ
あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

あはれと涙あふあふ

不二の宮ハ富士
山ヲ云駿河國

富士郡ニ在、孝謙天皇五年六月一夜ニ出現ト云祭神
木花開耶姫淺間權現ト稱ズ鳥居ノ額ニ三國第一山
トアリ故ニ又不二山ト書勿
論名所ニテ世人ノ知所ナリ
上野ハ東都ノ良ニアリテ山ヲ東叡ト云寺ヲ寛永ト
云寛永年中慈眼大師開基ノ靈場ニテ西都ノ比叡山
ヲ模スト云此地舊ハ藤堂家ノ館地ニテ地勢伊賀上野
城ニ似タル故ニ此名アリト今山口車坂屏風坂ナド
云アルハ皆伊賀上野ノ坂名ナリト云谷中ハ上野ノ
西感應寺ト云天台宗ノ太伽監アリテ上野ニ隣ル此

兩處ニハ分テ花木
多遊觀ノ地ナリ

宵よりつとむ

ツドヒハ湊輦
等ノ字ヲ用ユ

ヨリ聚ミ
ルナリ

あはれと涙あふあふ

千住ト書奥州往還
寂初ノ驛宿ナリ

あはれと涙あふあふ

此五字ハ必詩文中ノ一句ナ
ルベシ出書未考或ハ古文前

集此去三千里ト云意カ前ハス、ムト訓
ズ途ハミチニテ前途ハ行先ト云ナリ

幻のちや

夢ノ世ト云ガ如ク人生ノハカナキヲ喻フ

り春やる等あゝの月ハ泪

杜甫春望詩感時花濺淚恨別鳥驚心文選
古詩王鮪懷河岫晨風思北林古樂府枯
魚過河泣何時還復入

奥羽ハ陸奥出羽ヲ云行脚ハ傳
燈録ニ古靈行脚ト云リ旅行修

奥羽ハ陸奥出羽ヲ云行脚ハ傳
燈録ニ古靈行脚ト云リ旅行修

行ノ一 是ては乃姦の恨と子ぬといふも 禪則ニ

天季履芳楚地花ト云句アリ白髪ヲ雪ニ喻ルヲハ和
漢ニ例多シ○按ルニ此吳ハ或ハ五ノ字ノ誤カ五天
ハ五天竺ヲ云ニ體詩五天
到日頭應白ト乃此意ナリ

列長
字の八つは海す 神社ニテ下野國總社村ニ立室
八嶋大明神ト號ス祭神富士淺

間祖神ト云乃木花開 耶姬ニテ下ニ見タリ 曰 乃のむさくや姫の神と云

東氏小庭業一おふ 本のおさくや姫の神と云

中 字の八つと 日本紀云時彼國有美人名曰鹿茸
津姫亦各神奇而津姫亦皇孫因而棄之即

一夜而有娠皇孫未之信故鹿茸津姫乃念恨作無戸室入
居其内而誓之曰妾所娠非天孫之胤必當蠱滅如實天
孫之胤火不能害即放火燒室始起煙未生出之兒號火
闌降命次避熱而居生出之兒號火火出見尊畧無戸室

俗ニ塗籠ト云ガ如ク 出入ノ戸口ナキ家ナリ 焼と讀あり傳ふもこの

謂也 ありてハ 故實ハけの烟と云ふ一原分ハ載新古の讀出

々々々々々々一説ハ此中ハ子清ありけり其水氣 此の

とありと云ふと抄す コノシロハ鱸鰯等ノ字ヲ用

誤ニテ鯨ハ字書ニナシ是等ノ類ハ多ク小野篁歌字

盡ト云書ノ過失ヨリ出是書ハ童子ノ手へ授クベキ

モノニ非ズ○いへり此ハ小位多れよの川をいへり

て是をいへり此ハ小位多れよの川をいへり

此ハ小位多れよの川をいへり

とこの子乃ちあらはつたやうにける十訓抄のうへに侍る
そこのおちろハ子代やうなるものなりと云ふことはいふよりいふ
くハつか
ト云

別後
日光山ハ下野國河内郡ニ在

祭神事代主命開山ハ勝道上

人ナリ東都ヨ
リ北三十六里 濁世ハ法華經ニ 示現阿弥陀經等ニ

五濁惡世ト云是ナリ五濁ハ業濁見濁煩惱濁衆生濁
命濁ナリ五塵ハ眼耳鼻口心ノ塵汚ヲ云或ハ色塵聲
塵香塵味塵觸塵ヲ云此五濁五塵凡ニ皆娑婆世界ノ
惡ムベキヲ目ス示ハシメスト訓ズレテ見スルノ略
ナリ現ハアラハルト訓ス濟渡ノ爲ニ
アラハレ在ヲ示現ト云佛經ノ語ナリ
衆門ハ沙門ノ音譌ト 正直偏固の者也 正直偏固ハ
云沙門ハ僧ノ梵語也 俗ノ正直ト
遍ト云ガ如シ偏固ハ 剛毅木訥乃仁まじうきとせむ
片ヨリ傾クナリ

論語ニ剛毅木訥近仁トアリ剛毅ハ氣象ノジヤウブ
ナルナリ木ハ樸ト通ジテツクロヒカザラヌヲ云訥
ハ言語ノ無調法ナルヲニテ 氣象の法
何レモ律義者ノサマナリ 氣象の法
學ノ序ニ其氣質之稟トアリ人人生付テ稟得
タル氣象ヲ云清質ハ潔白ナルカタギナリ

和月和月の辰
從昔以沛山と二荒山と書と云海大師の

の時りえと改め人 空海ハ弘法大師ヲ云元亨釋書云
釋空海世姓佐伯氏讃州多度郡人

父田公母阿刀氏夢梵僧入懷而有身在胎十二月寶龜
五年生焉母思其夢小名曰貴物成人之後就沙門勒操
受法而落髮初名教海後自改如空延曆十有四年登東
大寺壇受具足戒又改空海二十有二年從遣唐使入唐
元和元年秋八月歸太同太上皇入壇灌頂帝者密灌於
氏始焉弘仁七年遊紀州相勝依上高野山創金剛寺承
和二年海在子此二月二十一日結跏趺坐入定延喜二
十五年冬十月賜諡弘法大師 大師國師ノ号ハ睿帝王ノ師トナルノ
林ナリ故ニ多ク死後ノ益ニ賜フ 空

形辭攝曰安要期此住曰居ト安居ハ物寂
ニシテ居ヲ云○友人僧懶菴云天竺ノ一
年ハ春夏冬ノ三季ニテ秋ナシ故ニ一季
ハ中華ノ四ヶ月ニ當ル中華ノ今月十五
日ヨリ翌月十四日マデヲ一月トシテ上
十五日ヲ黒月ト云下十五日ヲ白月トス
中夏ニ上弦下弦ト云ガ如シ一夏九十日
トハ夏一季ノウチニテ結制スル日ヲ云
九十日ニテ一季ノ
盡ルニハアラズト

那ハの悪ムハト云

是ハ那ハの悪ムハト云
是ハ那ハの悪ムハト云

より聖哉小ト云

是ハ聖哉小ト云
是ハ聖哉小ト云

多ク信実

野ハイヤシト訓ズ野夫ハ禮義
ヲシラス輕キモノ、稱ニテ今

民間ニヤボト云詞

モ是ヨリ出ルナリ此ハ經義マワリト云

子ハおの左 け馬のうやうやと云

一ハ け馬

馬ハさとあるより韓非子云齊桓公伐孤竹
春往冬還迷惑失道管仲曰老馬之智可用乃

放老馬而隨

名ト云うと云の化度マウ鬼怒川の古

之遂得路

名ト云うと云の化度マウ鬼怒川の古

別

黒羽の銀代降臨する何ゾ

銀代ハ降臨のハ一銀を名
前多指と云降臨する何ゾ

ハ大衆衆乃 朝夕勤と云い自の勤も休むて

と云いハ訊の事ある俗の言と云ふ○けニ白ものつもの化
老ありハ白ものつもの化と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
もも休むと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
死のゆゑと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
ふハ何ぞハ小活動と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

ウクルト訓ジアタルト訓
ジ感ニ依テ來ルモノヲ云

別長
修驗光明寺修驗トハ俗ニ云山伏ノコナ
羽州大沼山修驗靈應ノ説

二埋修驗德ノ丈ヨリ出ト云リ光明寺ハ
武州幸新不動院ノ末寺ナリ開基未詳
以者堂と

おす
行者トハ役行者ノコニテ名ヲ小角ト云元亨釋
書云役小角者公役氏今之高加茂者也和州葛木

郡節原村人少敏悟博學兼郷佛衆年三十
二棄家入葛木山後載母於鉢渡海入唐

る山ト云結とねむと逢ハ

世傳小角常ニ木履ヲ著テ嶮岨ヲ行フ平
地ノ如シト故ニ此像ハ必ス著履ノ形ヲ作
ル又世説ニ謝靈運展ヲ著テ山ニ登ル
コトヲ載スコレヲノタチ入ナルベシ

別長
當小角著履とのねくは佛頂和る山志記あり

雲居ちと那須のこちふりて孫宗あり佛頂和るはりや東都深
川衣衣寺は住してあり系神託原衣衣寺ハおろしと云々ト云田々云
後此寺を岸古小まゝとて思ふ小付ゆり松原
山中より居橋す
徳雲の爐と云今俗名と云いせぬなりかつの海
乃思ふもふと云とあるなりやあま云云
山と云

あねくはさうそ
古分ふ 兄と云ハ妹と云ふなりは云々云々
も美しきみづの山と云る風情なり切なり

初ある 十系ある 下橋と渡り山門小入
雲居ちと云る

あかど云佳境ある所留十系ハ玉机峯玲鏡岩水分石龍雲洞
十梅林千丈岸竹林塔海岸閣飛雪亭鐵蓋峯五橋ハ獨
木橋凡幾橋瑞雲橋涅槃橋梅船橋三水ハ神龍池嶺虎
井頭寺泉ナリト京師下岡崎蝶夢坊文通ニ云越セリ中
門ハモト一山ニ入處ノ門ヲ云釋氏ハ專閑寂ヲ貴ミ
山居ヲ事トス故ニ山号ヲ稱シ門ヲモ山門ト名クト
下説ニ山門ハ三門ノ誤ナリ寺門ハ
貪瞋痴三毒ヲ防ノ義ヲ取ト云リ

さてこの説は乃辰

妙禪師の花開法雲法師乃石室と云ふものなり

妙禪師ハ中華宋朝ノ僧ニテ高峯ト云山ニ處シ生涯戸ヲ閉テ出ズ法雲ハ法運ノ誤ナルベシ石室ニ龍馬糞ヲ焚羊ヲ煮テ食シ僧ニテ何レモ禪録ニ委シ和漢三才圖會云禪師號ハ後宇多天皇朝始於建長寺道隆法師稱ハ起於後教生石ノり此石ノ事ハ前ノ玉藻秦鳩摩羅什ト教生石ノり前ノ下ニ見タリ下説ニ教生石ハ本砒石也ト砒石ヲ俗ニ砒霜石ト云ハ誤ナリ霜トハ此石ヲ燒テ白キ粉トナシタルヲ云

野と横ふるをむあを部云

此山嶺は乃辰人語云ふもの入列ノ馬上の旅人と云ふはる

殺生石ハ温泉のむかひ法云何り温泉ハ博物志凡ソ水

温ト又法云あづの原の柳ハ葛城ノ里ニありて中畧云リ

の部守戸部某乃畧今ハけ柳枝のげりノふ

よりけり水あづの原柳ハありのふささのふささ

より一ノ名あり今ハ古人柳ヲ柳ト云汎物の借説よりありけ柳ハ葛城乃高のむかひ法云何り八幡堂ニ乃柳ありて

田一枚林く之なる柳の川

けるを乃辰ハ七ノ里ノ人ト云ふを乃辰と云柳あるなり柳ハあづの原乙女のと云ふものも勅さ旦と云ふものもあすふささあづの中ハ云ふおよはずのふささ一ノ名風情ニ云一ノ名と云ふものとすれハ柳枝あり乃を交テあづの原ハ乃辰の原ト云ひ一ノ名早乙女

田一枚林

さうさうさうさうさうさうさう
仕方とも素一糸の塵

ふりかゝる日敷の原
白川の関はこのとて は雲と奥列の入口を築城の名あり

白坂と云ふ所の南より下路と陸奥やの境あり境乃ゆゆと二
社並び立ち南ハ下社ハ陸奥社と云ふ此所或は此の
築城なるをだ一今ふ川と云ハ いづれ都へ使あり

橋達集 便ありといひて都へ告やん **之関**は一ふ 蓋説子

ふふ川乃せれと云ふ川の関 蓋説子 **之関**は一ふ 蓋説子

麻不破と云ふと云ふ川の関 **風操**乃人 かまハ風操あり

之関の一と云ふといひす **風操**乃人 風操あり

を云或ハ通じて **秋風**と耳 秋風あり

風操風操不化 **秋風**と耳 秋風あり

あゝいひのせ 清輔袋州子に云能因實ニハ不下向奥州

為詠此歌竊龍居シテ下向奥州之由風聞云 云二度下

向之由アリ於二度者實欺書ハ十嶋記古今著 云云

能因ハいひす 云云

せしん 云云

久と云ふ 云云

半り 云云

病 云云

素葉乃 云云

白川關スグル白ハ殊ニ發東ヒキツクロヒムカフト
云云人間云何等故哉答云古曾部入道ノ秋風ゾフク

白川關ト讀シタル所ヲバイカデケナリ

ニテハ過云殊勝事歟古曾部入道ハ能因ヲ云傳ハ下ニ見タリ

何ふル川と流る河ふる川ハ阿波隈川と云奥列往をふ川と和名乃高との所と流る名あり

いづのよやせやふらつと流る新古今やとあふる河川のあつとけいづのよやせやふらつと流る

みよ岩峰相馬ニ春サレタこは根ハ金津の山と云岩城ねるこまともふ岩峰後おれ

いづもも名所ありいふ山の時道まかけ作ハ機を

すの川の驛まも家とつふ者と尋てすの川も陸奥郡中津加川と云

風流サキ一尺やかくの田植う

奥列の田うへふハ生仏とふ目く法所乃能なり
とき傳ふけ生佛ハ事家物語よぬーと付て琵琶

よきや初事サレう一後無事ありあると
あや風流サキ一めとけやういさるあり

根弟ニとづけてニ事とふ一けニ事とふ

根むらふ山もうやと間ノ事とふ出處山深き岩

間寂ノ義ニテ物靜ナルヲ云

元亨釋書云釋行基世姓
高志氏泉州大鳥人天智

七年生及出胎胞衣裹纏母忌之并縣樹
枝經宿往見出胞能言父母大悦收而鞠

育十五出家居藥師寺基事行化遇嶮難
架橋修路穿渠池築堤塘州民至今賴之

王畿之内建精舍四十九處諸州往往而
在焉天平七年為木僧止此任始于基

十一年正月皇帝受菩薩戒乃賜號大菩
薩二月二日於菅原寺東南院右脇而寢

持たぬにけり。と佛教に云。衣寶珠の喻。とて。そ
 強而と一あるに。此の衆のゆく付ふ。なり。附録

海

いさおのうきと生くるの辰

桂皮ヒナギクの香を醸してあさこの山を

桂皮ハ本字日和四あり之
子ハ洒落少く桂皮とすカ

さしーやあけのうと安積山と書^{アサカ}安積郡ゆく今省北焉とあれ
葉之店^{ハエノタナ}の簷下^{ハエノタナ}ふ山の井あ架^カけ上^{カミ}る山と阿多^{アタ}が山と云小山あり
新^{ニホ}古^コ今^{イマ}ふ涉^{セツ}糸^{イト}とま^マるハ得^エ之^ノ ^{たき}市^チ阿^アさ^サの山^{ヤマ}歌^カさ
ん^ンあ^アる山の井^イを^ヲあさ^サく^ク人^{ヒト}を^ヲあ^アふ^フもの^{モノ}の^ノあ^ア ^宋女^メ ^此阿^アより^{ヨリ}派^ハ多^タ

一、ろく比もやそふあは

阿さの乃泥も名所也古宮多
一今此泥と少泥云ふ日和田

の町乃こゝめをや里人共傳へり云ふのこゝハ蕭説云菰乃事と
云ふ菰とは今の青菰事あり後世民皆云々菰葉をこゝ編
みぬと菰と名付く所小菰此こゝハ漢書菰と云ふて其菰
と稱ト是と云ふ川ある一 地名おまゝ或人云楊乃仲みちの

のわくふくありき像付は五月五日菰とぬきくしどあや
みくそとそ共し此床のたぐひをけむきくしよりけふ
けふぬきふくとつるをせしすちのれを板中將の両銀
手拂ときりふきゆかぬくの銭もあやなり侍りき何を
き固ハあなめさふと一銭中侍りたるも時りさあるばあさ
この花泥乃花づつとつるものあはる紅とぬけて侍りよりかく
ふさろぬて侍りぬとぞ云々の中ねの清館とは実方衣事すと
梅ぼるまふしをかりぬと云菰やうもの式ハ今の花菖蒲
乃類の今見る所の菰ハあらう
ふと称ずべきさあそ飛に銀色

二本松よると名なきいこ

黒塚の岩屋一尺一

二木村ハ狹狹多ク丹波家乃城下也
黒塚乃岩屋ハ安達郡あづきの原小

是も名所あり（抄）
 是も山なりと云くハ
 又按ずれば中華乃依強子情文を冤家と云
 云類より皆怨喻ある○又楊むるは鬼塚なるものありてこれ
 に列那智東光坊祐斐の悪鬼を伏せしを記すの事あり
 武州足立郡大字の南に鬼塚なる所ありけりともいふ所あり

隆慶の石碑も亦さへ
隆慶、隆慶の隆慶
 晉書羊祜傳云祜樂
 山水、每風景必造峴山置酒言詠終日不倦祜死後襄陽
 百姓於祜平生遊憩之處建碑立廟歲時享祀望其碑者
 莫不流涕杜預
 因名爲墮淚碑

莫不流泥杜預
因名爲墮淚碑

公及七弟乃其子也

類書纂要云武人以端午于用武之處爲筭
揚之技盡爲鬪勇之戲藤森社緣起云天應
年中異國蒙古貢來被祈由當社五月五日
大風吹而翻波浪蒙古悉滅却畢以此因緣
每年五月五日祭礼神幸時在地之神人鑑
甲冑帶弓箭自谷以降小男兒帶作太刀等
以菖蒲飾之稱菖蒲太公按スルニ菖蒲ハ勝負ノ義ヲトルナルベシ
又按スルニ此日鍾馗ト云者ノ貌ヲ幟ニ
画テコレヲ建ルハ黃帝蚩尤ヲ殺テ後ニ
其形ヲ旗ニ画テコレヲ民間ニ建テ以テ

邪氣ヲ防^ガヒムコ^レヲ螢光旗ト云ト古書
 ニ見タリ螢尤旗ト鍾馗ト音近^キ依テコ
 レヲ誤ルカ勿論世人ノ云鍾馗ハ唐玄宗^ノ
 臣ニテ帝ノ夢ニ來リ夜鬼ヲ食^シノ説ハ唯
 逸史ニ載ルノ^ミテ正史ニ見^ズス故ニ
 古人コ^レヲ論ビテタ^ニカナラストス
 杉板の余波にも^シず^ミの^ミ帝^ノの^ミ孫^ノ

余波ハ又波餘ト云國語ニ見タリナゴリト和訓
 スノコリノナリ桑折ハ往還宿也名所ニハア

バヲ覇 旅邊土の行柳橋身無常の観念 及ヒ旅

行脚ノ説ハ前二記入邊土ハ片田舎ノ土地ナリ捨身
ハ道ノ爲ニ身命ヲ顧サルヲ云無常ハ定ナキナリニテ

何レモ儒佛家ニ立ル所覺ハ心ニ
テ視テ云念ハ心ニ絶ス思フナリ 伊達の大由

此ノ伊達郡の入口に園塞の地あり此處の地也

とてさきの郡に入るとは前中お実方の保はつ
 くのとあつて 枕初と山の崎と四寸のさふと云行
 ぬととらふす白石乃降と伊達家の后片念ひするにこれ成
 する郡ノ字ハ或ハ庄郷等ノ誤ナルベシ笠嶋ハ郡名
 ニアラズ実方ハ八雲寺ありて一降たを原尹と孫傳後
 室母也母たを原孫傳也右中將に位下陸奥守長徳
 四年十二は於任國卒前系圖ハ長保元年四月廿六
 日於任由陸奥卒由室之月と云ふと云ふ御子又云け御方
 初成と同時の愛上人とありての殿上おくは神とて初
 成乃冠成勢ありておるなりと云ふぬ神にて冠と若
 神とてありておるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 乱冠とありておるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 ちなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 実方とておるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 されつおるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 抄ハハの中將とておるなりと云ふなりと云ふなり

いふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 仍く陸奥中將とておるなりと云ふなりと云ふなり

乃紀伊の社とておるなりと云ふなりと云ふなり

実方望海道祖神のおとらふなりと云ふなりと云ふなり
 あつて馬もなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 乃紀伊とておるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 乃紀伊とておるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

乃紀伊とておるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 乃紀伊とておるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

乃紀伊とておるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

乃紀伊とておるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

乃紀伊とておるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 乃紀伊の町中とておるなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
 和漢三才圖會云

ものハ今ハ清なり一或ハ山ノ秋をともむとて一あやてはらう
つらなるもの然るもバホサ秋ハ見ち山秋をえたるも一わや
よりサ秋ハともむのうちハ刈がせハおと年よきて其の幹を
み枝とせし一も伐あし一むさくる山秋野秋ハ
きも同ドの事ごとお年の刈取ふりし
物れものよりハふ葉をともふあうり

あやにのちひ咲ころ也 お田より路はド一の岡をえ
取つるけお田をえのうたるれおは

一のあやあやとむらく 後成 阿やとハ馬酔木と云ふ文の
といハ別ちあやとほのりあり ひとことハ松をわお色くおちふ

みきりひいさといよみ た々大を ひみの
さとりせとふの

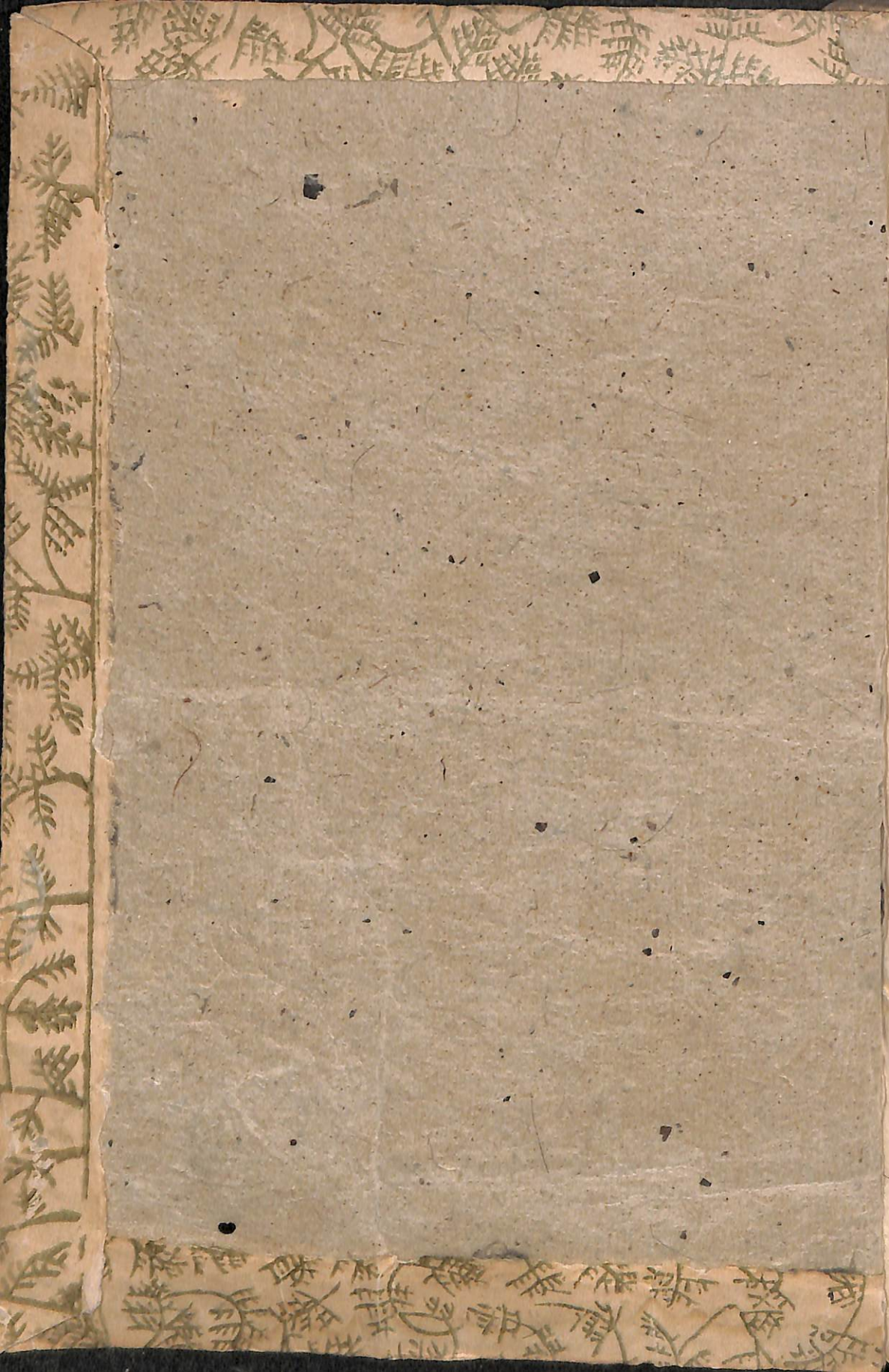
おはちをぬとる たくのぬさハ名所ハ能す十并乃里ハ名あり 新古今入
しあささまり

おのぬさハ名所ハ能す十并乃里ハ名あり 新古今入
人もさぬの浦ハあやをぬふつらく清秋の秋ハ 橋お

十并ハ菅とぬとぬと 新古今入 園おふたずとと
さの

あやの秋初はもち おとて 十并のすのさ 能作 方角抄
さのくはさの夏菰とぬとと 能作 藤手とさのさあやん

奥細道菅菰抄上 終



Vertical text on the left side of the right page, likely bleed-through from the reverse side. The characters are faint and difficult to decipher, but appear to be in Chinese.



Vertical text on the right side of the right page, likely bleed-through from the reverse side. The characters are faint and difficult to decipher, but appear to be in Chinese.

Handwritten signature or mark at the bottom right of the page, possibly in Chinese or Japanese characters.



